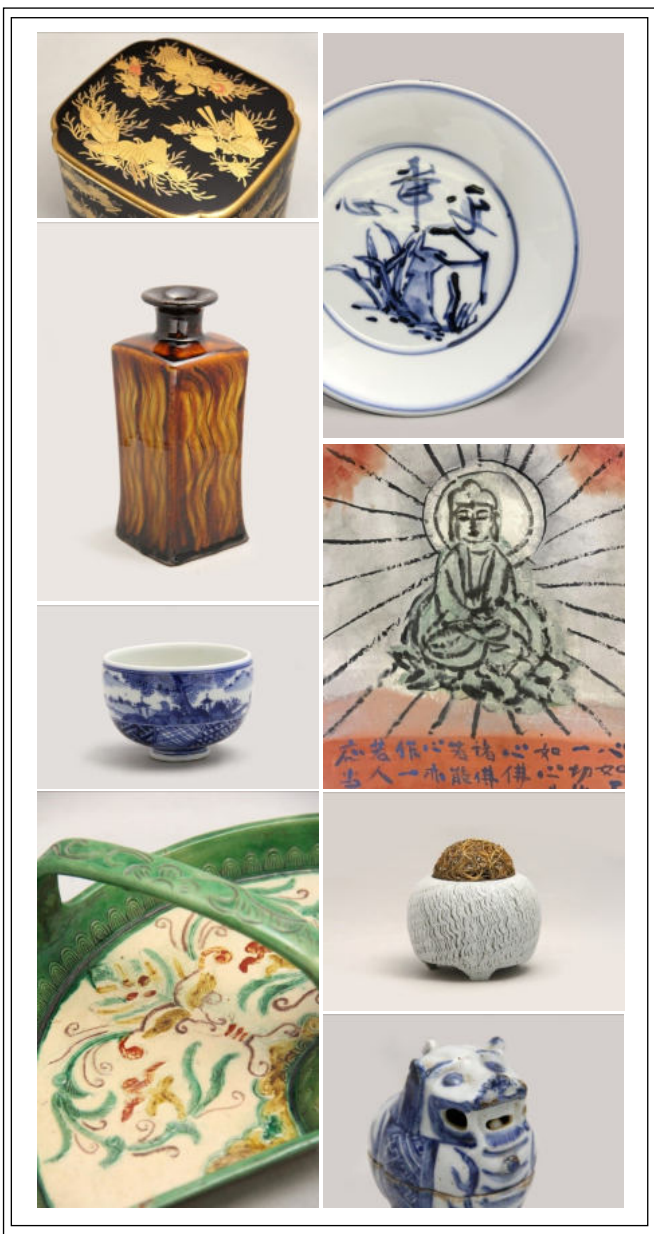




# 連峯堂 彩り 初夏号

RENPOUDO'S COLLECTION SUMMER.

HPIはこちら



奥田連峯堂

TEL:075-561-3655

FAX:075-525-1148

営業時間：11時 - 18時

定休日：毎週水曜

〒605-0073 京都市東山区祇園町北側244

<https://www.renpoudo.com>

✉ [renpoudo@mth.biglobe.ne.jp](mailto:renpoudo@mth.biglobe.ne.jp)

1.

## 亀文様花瓶

### 源内焼

江戸時代

口径13cm 胴径21.5cm 高さ22cm

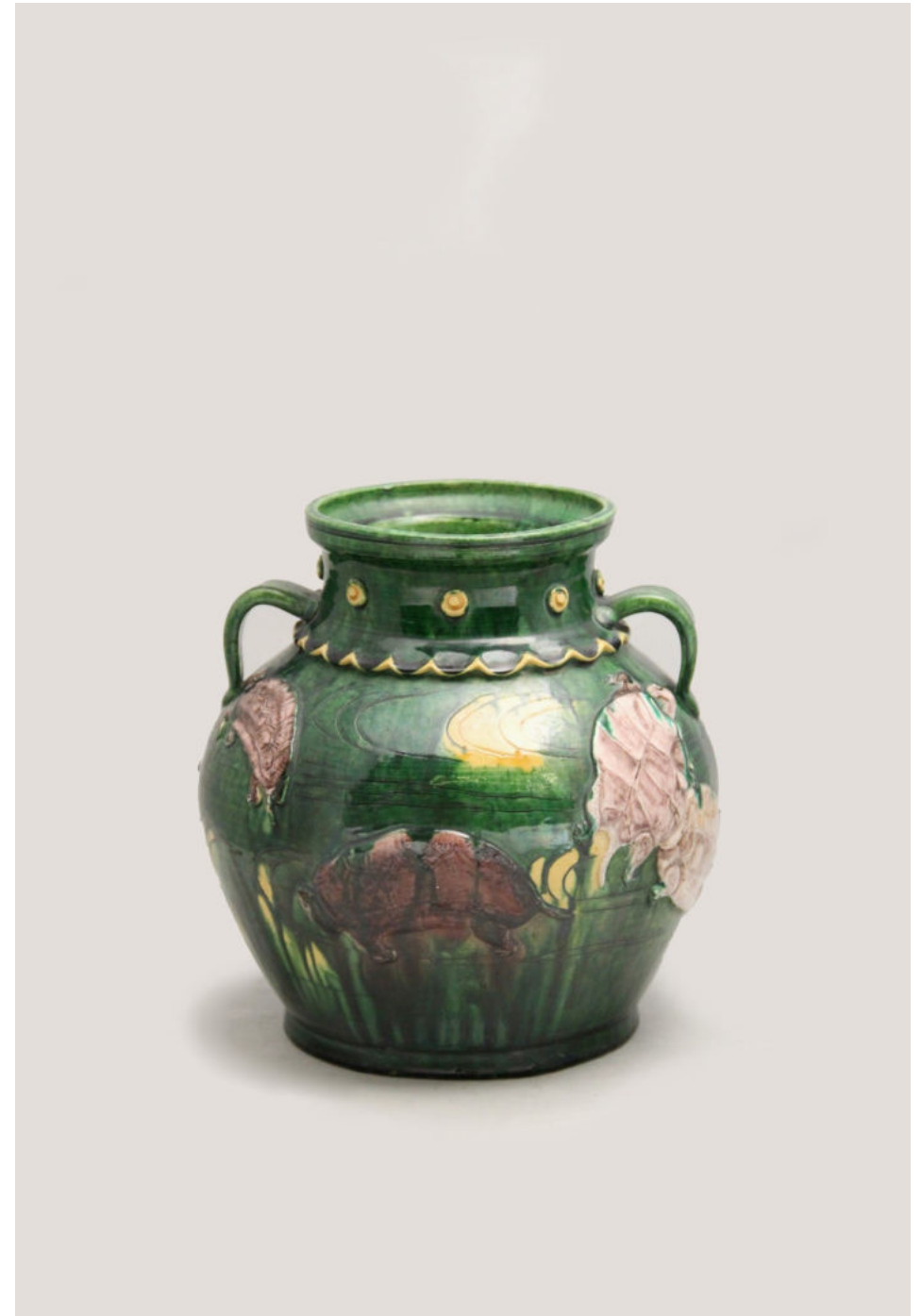
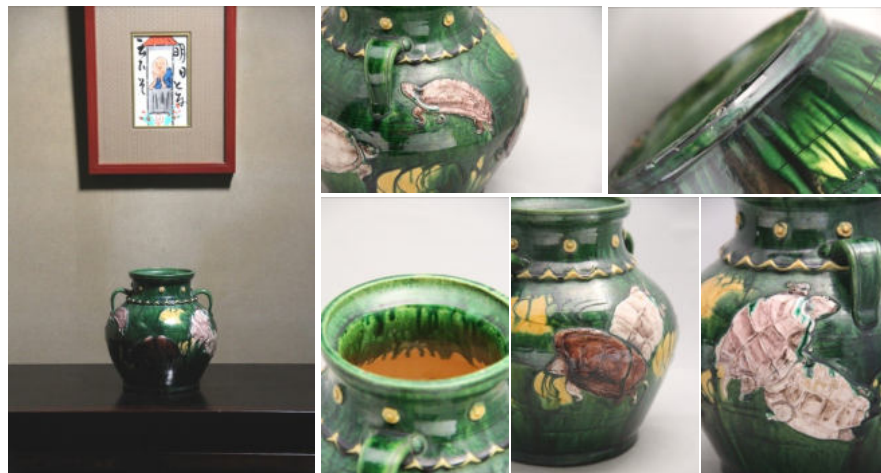
耳が付き、緑色の地に亀が泳いでいる様子が陽刻されています。

高台の底に直しがあります。口縁に釉薬のハガレとひつつきがが見られます。胴部分の亀部分に釉薬のハガレが見られます。

源内焼は江戸時代に平賀源内の指導によって源内の故郷 香川県志度（現さぬき市）で焼かれた三彩のやきものです。

源内は博物学者として長崎に遊学した折にオランダからもたらされた新しい釉薬の技術を学びます。

その技術を用いてふるさと讃岐・志度の産業を振興させるため、新しい三彩軟陶質のやきものを指導しました。



2.

## 三彩花文手付扇面鉢

### 源内焼

江戸時代

径32cm×21cm 高さ9.5cm

手付きの扇面の鉢に小碗が付いて、鉢と一体となっています。

縁にソゲ、ホツやひつつきが見られます。手付きの内側にひつつきが見られます。

「源内焼-平賀源内のまなざし（2003年）」図録に類似品が掲載されています。

箱書きは、陶磁器研究者・陶芸家であった小山富士夫によるものです。



### 3.

#### 笹に蛙熨斗押

#### 平戸焼

19世紀

径13.5cm 高さ2.5cm

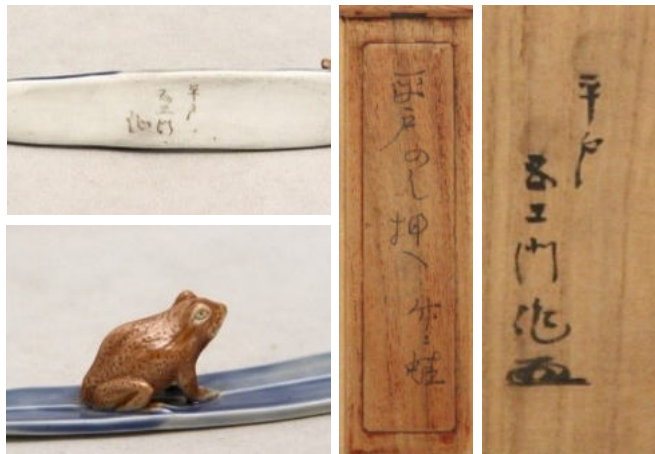
笹の葉に蛙がのっている熨斗押です。大変細かい作業が施されています。

作品と箱の蓋の裏側には、「平戸 五右衛門 作」の銘があります。

「肥前平戸焼読本 野田敏雄著 創樹社美術出版」に類似品が掲載されています。

平戸焼は、長崎県佐世保市で生産される陶磁器です。安土桃山時代、平戸藩主 松浦鎮信が朝鮮人陶工を連れ帰って、平戸市山中町に御用窯を開きましたが、その後、三川内に移され現代まで続いています。

世界的に白磁が知られており、きめ細かい地肌とその白磁に映える繊細優美な染め付け、透かし彫りなどの細工物、高温で焼成したような珠のような輝きが特徴です。



#### 4.

#### 古伊万里 色絵角瓶

江戸時代

口径3.2cm 胴径9.5cm×9.5cm 高さ13cm

桜、梅、菊、牡丹の文様が描かれています。

桜は、毎年美しく咲き誇る姿から華やかさや繁栄を意味します。梅は、寒い冬でも葉が枯れないため、その強さから忍耐力や生命力、子孫繁栄の象徴とされ、新春を代表する吉祥文様です。菊は、皇室の御紋にも使われている大変高貴な花で、古くから菊は邪気を払う縁起の良い花とされており、無病息災・長寿のシンボルです。牡丹は、美しい大輪の花を咲かせる牡丹は百花の王と呼ばれ、古くから着物の柄として用いられてきました。咲きはじめは小さな蕾ながら、後々大きな花を咲かせることから豪華絢爛、幸福、高貴という意味も持ちます。

下部部分にスレがあります。胴の窓絵の部分や花びらの部分の金彩が剥がれています。



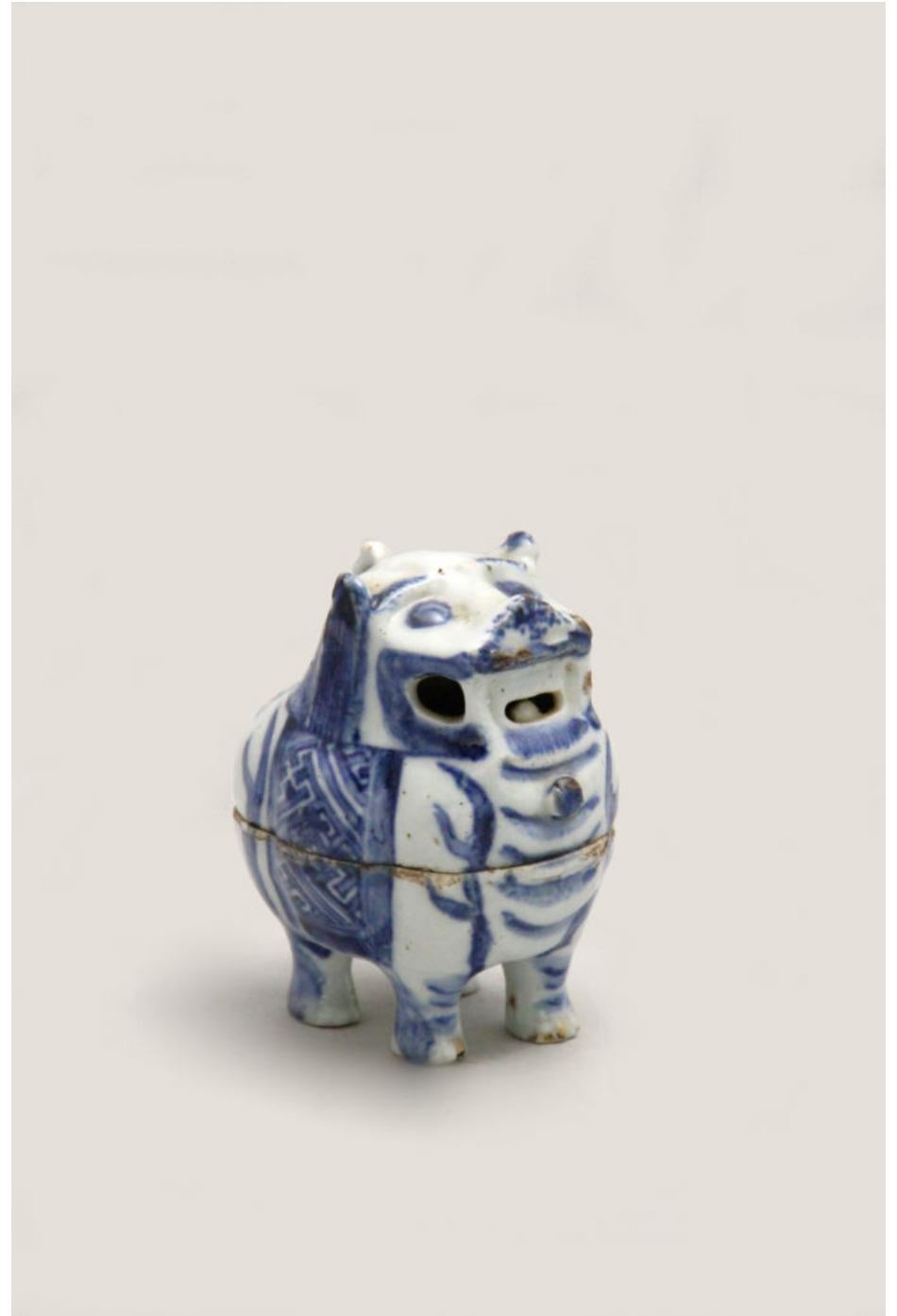
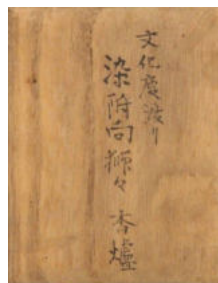
5.

## 古染付 獅子香炉

中国 明時代末期（17世紀）  
径7.8cm×5.8cm 高さ8.8cm

口の部分が透かしになっています。  
身の縁の部分にソゲがあります。

古染付は、中国 明時代末期・天啓年間（1621 - 27）頃を中心に、江西・景德鎮の民窯で焼かれた染付磁器で、日本での呼び名です。



6.

## 松梅壺

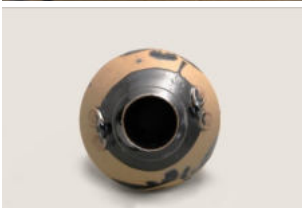
河井 寛次郎

共箱

大正 - 昭和

口径9.5cm 胴径19cm 高さ22cm

大正から昭和の時代、民藝運動の中心的役割を担った陶工 河井寛次郎の作品です。本作品は、河井寛次郎の初期の作品です。中国 南宋時代 磁州窯の黒釉搔き落としの技法を取り入れた作品です。



反対側：梅文様



7.

## 白釉鐵絵花瓶

濱田 庄司

共箱

昭和

人間国宝

口径6.5cm 胴径15.5cm 高さ22cm

両面に鉄釉で庄司の代表的と言える文様の糖黍文を描いています。

首の辺りから胴にかけて梅花皮状に少し縮れており、胴には窯で焼成時にできた釉葉のめくれがあります。



8.

## 飴釉花瓶

船木 研兒

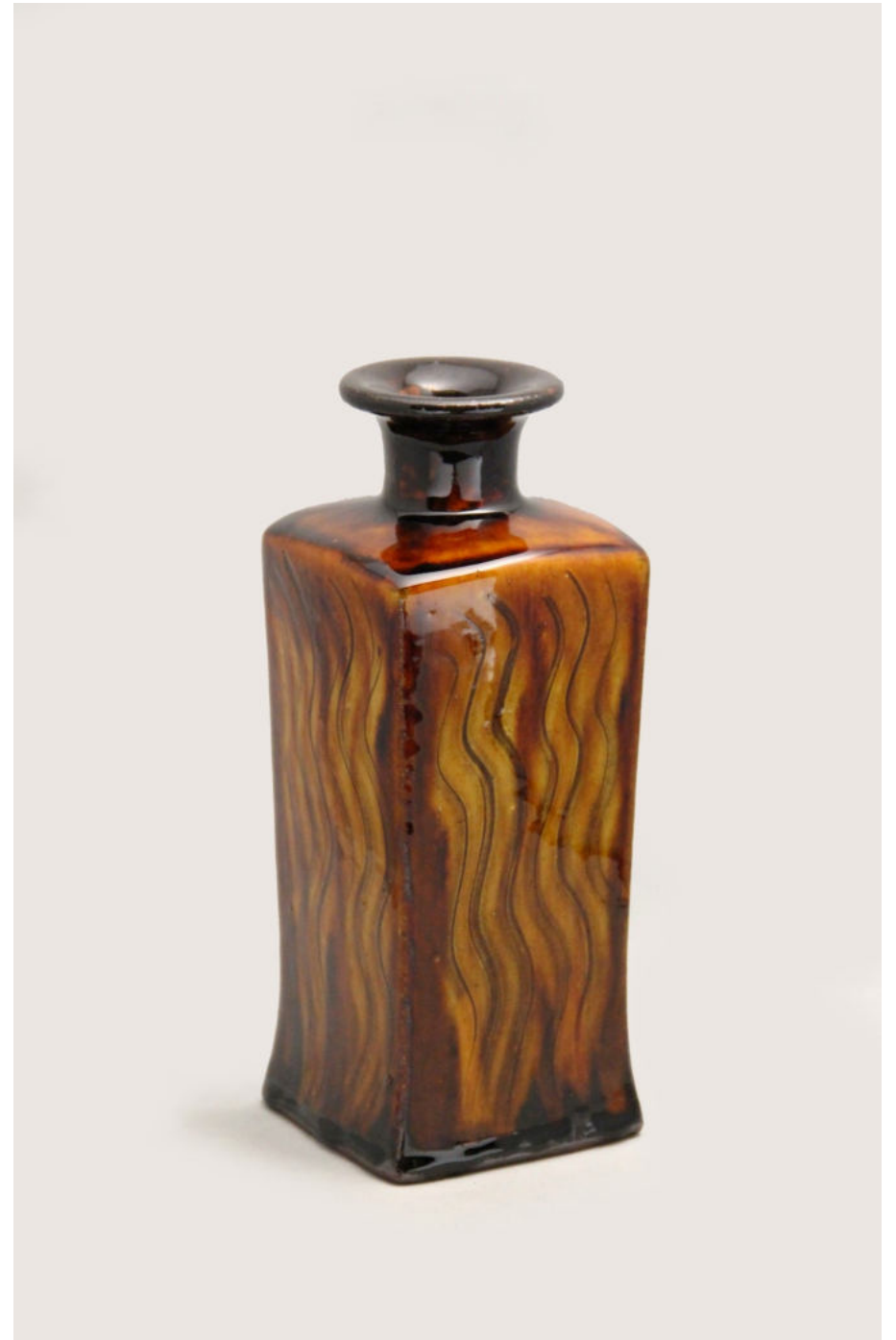
共箱

昭和 - 平成

口径6.8cm 胴径9cm×9.5cm 高さ23cm

四面に曲線が彫られ、その上から透明の釉薬が掛けられています。褐色から黄色への色の変化を楽しめます。

島根県松江市の宍道湖畔に船木窯があります。江戸時代より170年の歴史を持ち、その五代目である船木研兒は、早くから父・道忠を手伝いながら、浜田庄司やバーナード・リーチより学びました。



9.

## 交趾唐草彫水盤

永楽 即全（十六代 永楽 善五郎）

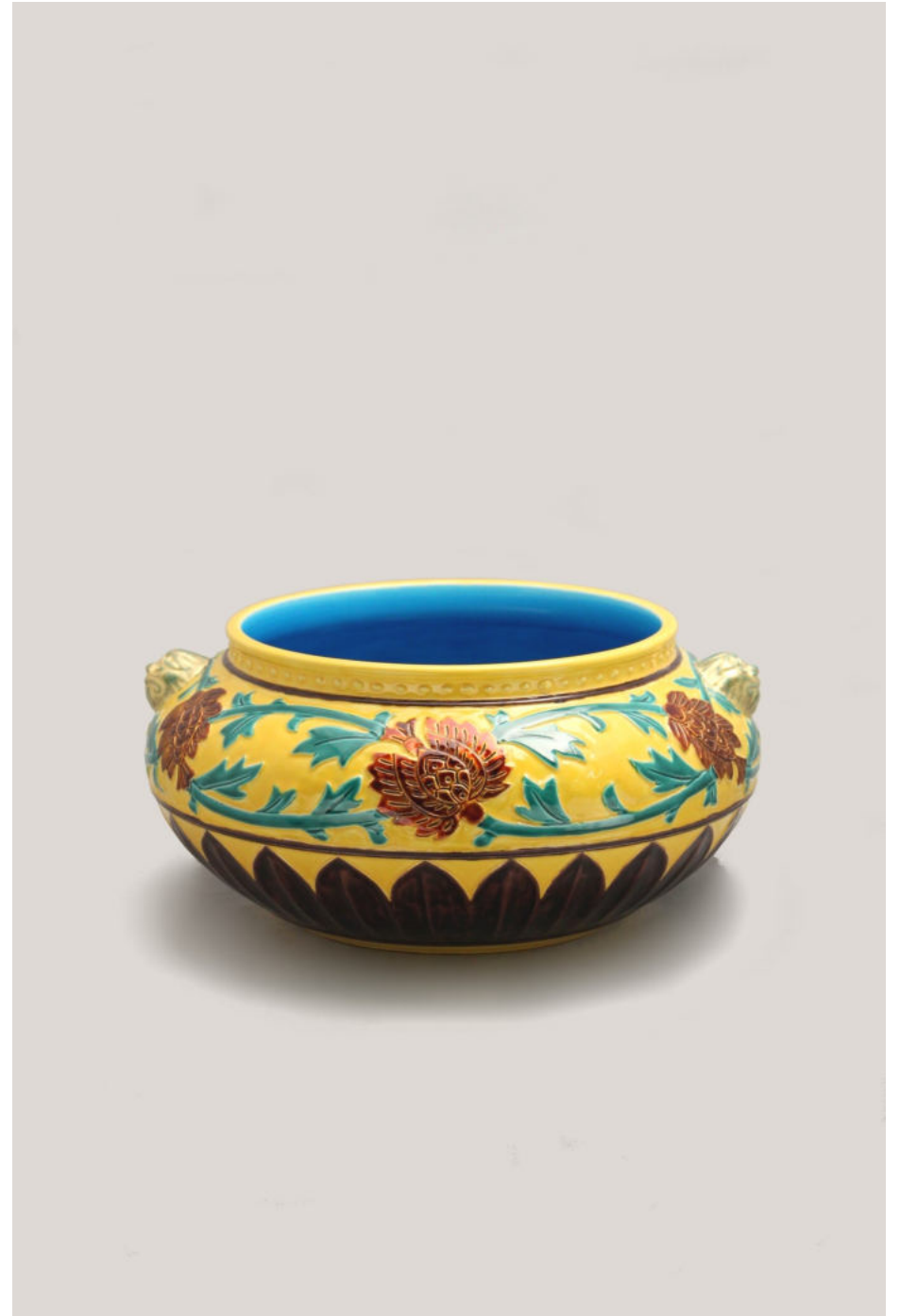
共箱

昭和 - 平成

径33.5cm 高さ16cm

外側は黄色地に唐草文様が描かれています。  
内側は鮮やかな浅黄色です。

「永楽善五郎 永楽紘一・大原永資監修 光村推古書院」に  
類似品が掲載されています。



10.

## 染付平常心飾皿

富本 憲吉

共箱

1952年

人間国宝

径23cm 高さ4cm

草花と岩が描かれた上に、「平常心」と書かれています。高台内に「富」の印があります。



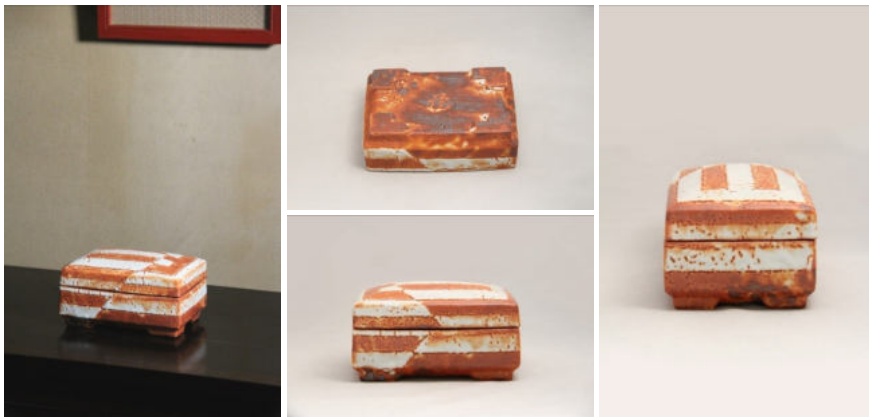
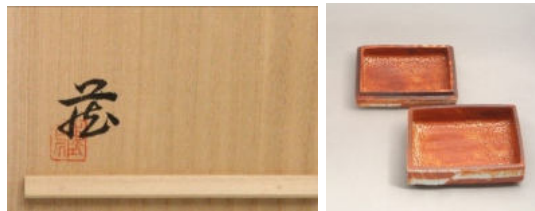
11.

志野陶管

鈴木 藏

共箱  
昭和 -  
人間国宝  
径19cm×13cm 高さ10.5cm

現代の美濃を代表する作家で、人間国宝の鈴木藏による陶管です。  
志野の大変良い色合いが出ております。飾ってお楽しみ頂けます。



12.

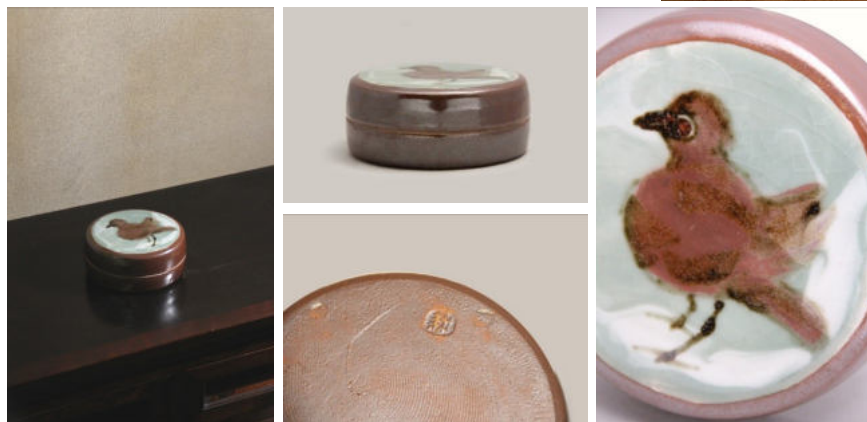
## 鳥文丸蓋物

田村 耕一

共箱  
昭和  
人間国宝  
径16cm 高さ7cm

蓋の表に、貫入の入った青磁の上に、赤色の辰砂釉で鳥が描かれています。

田村耕一は、富本憲吉から指導を受け、濱田庄司から認められ、生まれ育った栃木県佐野市に自身の窯を築きました。その後、鉄絵で人間国宝に認定されました。



### 13.

#### 堆瓷象裂香炉

松井 康成

共箱

昭和 - 平成

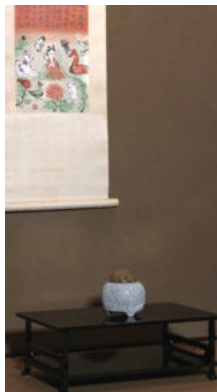
人間国宝

径11cm 高さ11.5cm

堆瓷・象裂は、色のついた泥漿で模様を重ねて描く技法にさらに土を被せ表面に傷をつけ その効果を狙って焼成したものになります。高台に「康」の銘があります。

松井康成は長野県に生まれ、その後、茨城県笠間市の月崇寺に窯を築きました。

日本をはじめ、中国・朝鮮半島の古陶磁を研究しました。その中でも、異なった色の土を混ぜることにより模様を表現する練上の技法と出会い、生涯にわたりこの技術を追求しました。試行錯誤の末、象裂・堆瓷・晴白などの様々な技法を新たに開発し、人間国宝に認定されました。



14.

## ラスター彩水禽文透彫香炉

加藤 卓男

共箱

昭和 - 平成

人間国宝

径9.5cm 高さ10.5cm

ラスター彩は9世紀にメソポタミアで始まり、14世紀以降に衰退してしまい、幻のペルシア陶器と言われている技術です。金属的な光沢が特徴です。そのようなラスター彩に加藤卓男は魅入られ、復元を志し、残りの人生を賭け、試行錯誤の結果、復元に成功しました。側面に鳥が描かれています。高台には「卓」銘があります。



15.

## 染付鳥文香炉

六代 清水 六兵衛

共箱

火屋：加藤宗厳

昭和

径11cm 高さ12cm

側面に鳥が描かれた香炉です。大変厚みがあり、どっしりとした香炉です。

清水六兵衛は、江戸時代中期以来の清水焼陶工の名跡です。六代六兵衛は、京都市立絵画専門学校で、竹内栖鳳や山元春挙らに日本画を学びました。

火屋を制作した加藤宗厳は、京都の金工師です。

父 嘉七に、金属を叩いて鍛え彫る彫鍛金技術を学びました。



16.

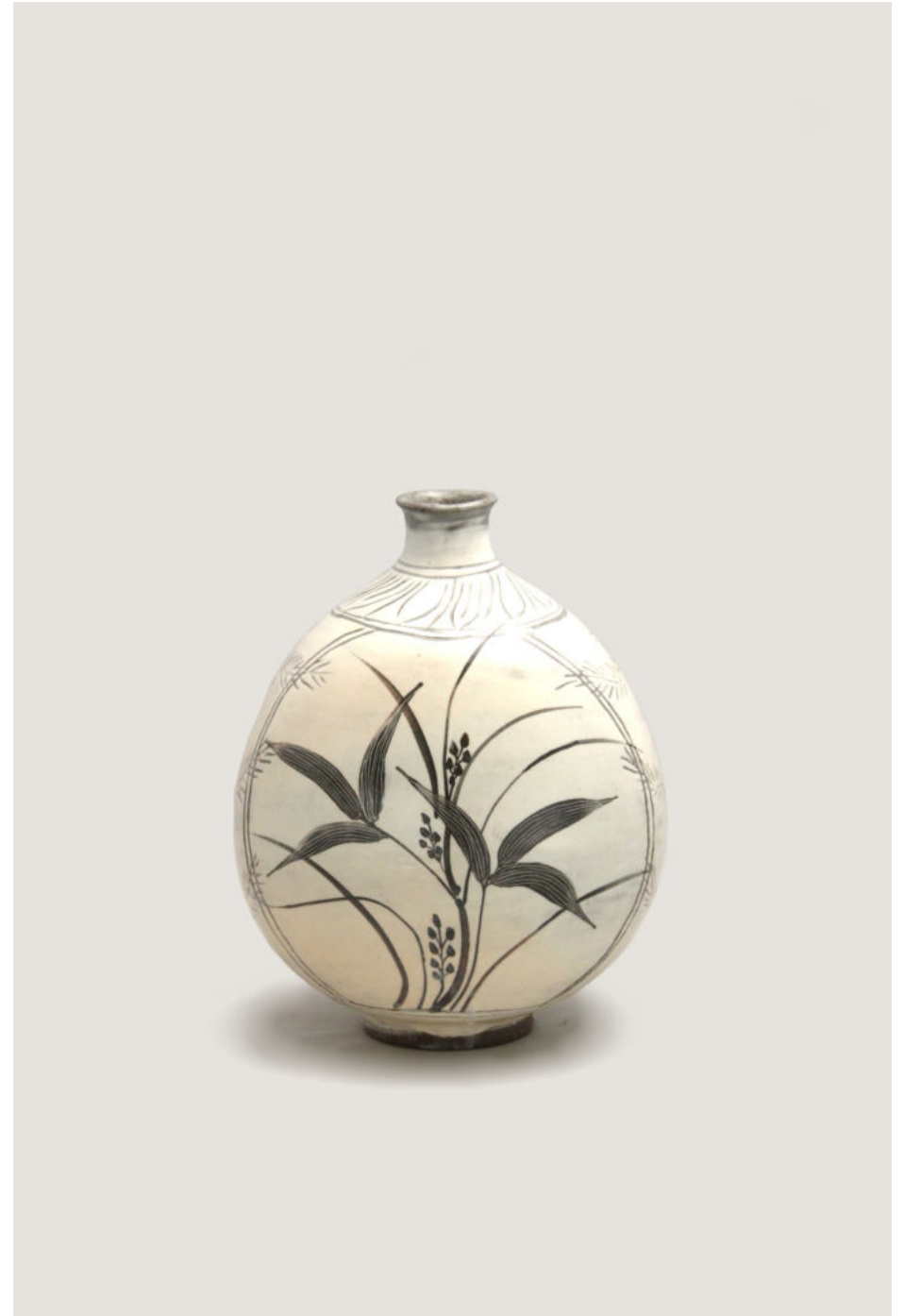
## 刷毛目草文扁壺

中里 重利

共箱  
昭和 - 平成

白土が部分的に掻き落とされ、草の文様が表現されています。

中里重利は、人間国宝 中里無庵の三男で、伝統ある陶芸家の家系です。熟練された轆轤技術で 古唐津の茶陶を基本にして洗練された完成度の高い作陶を展開し 唐津焼の重鎮として活躍しました。



17.

## 海松貝蒔絵提重

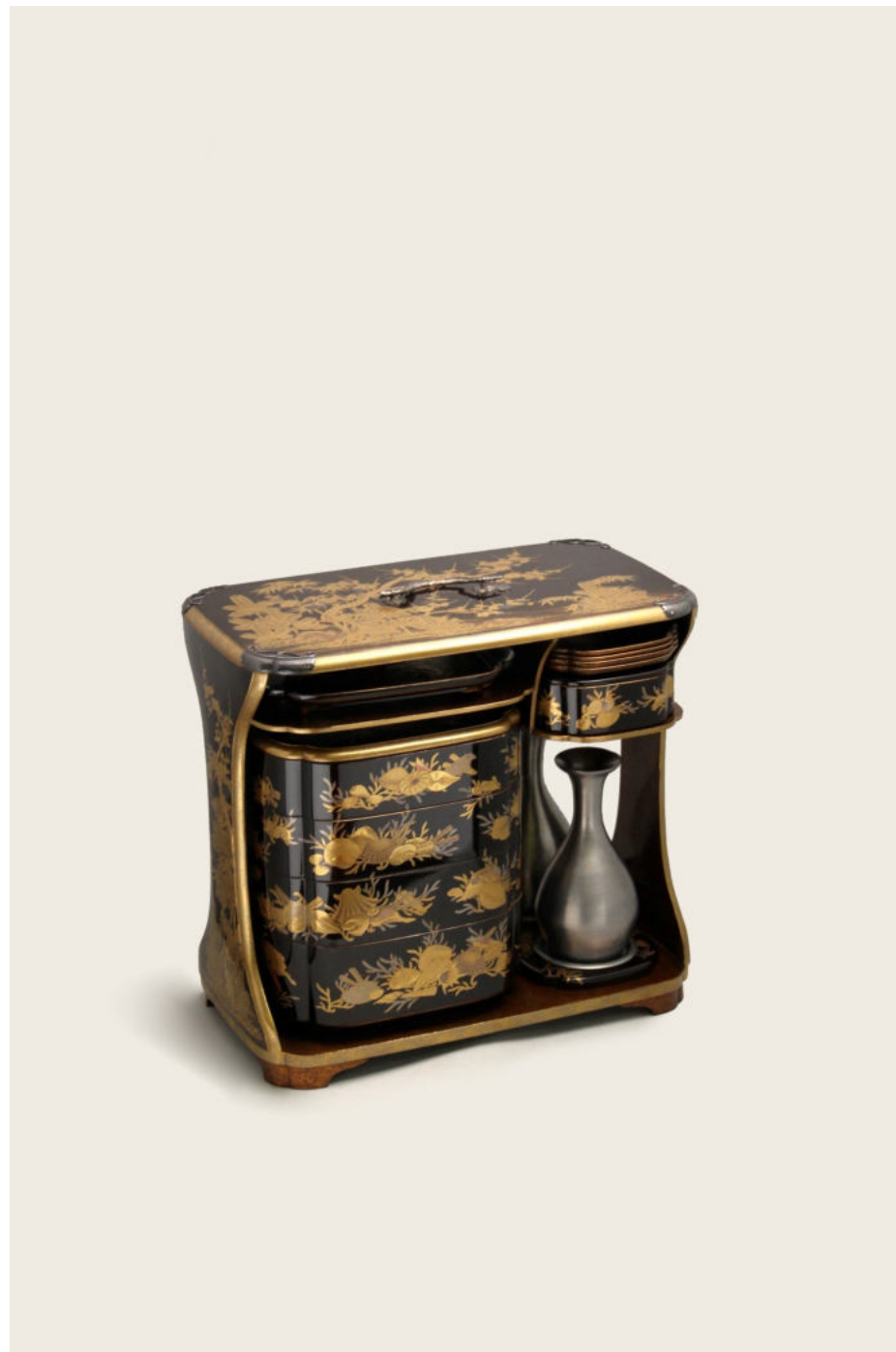
幕末期

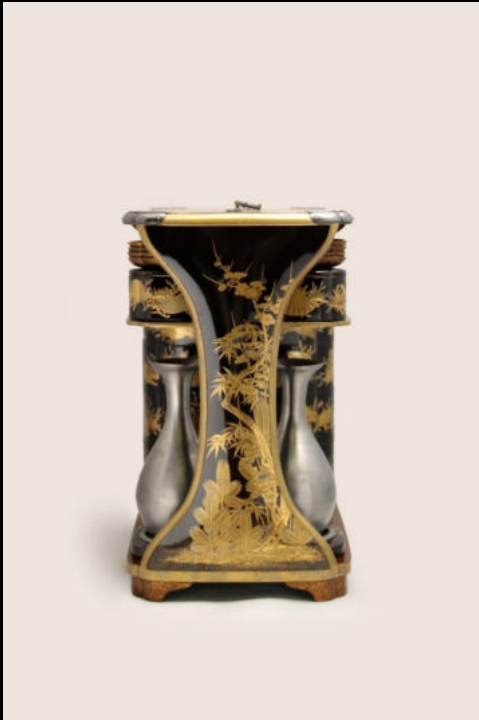
外枠：径32cm×18cm 高さ29.5cm

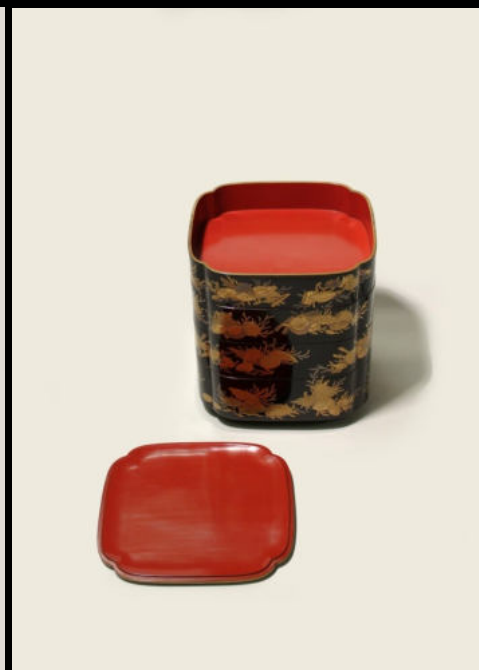
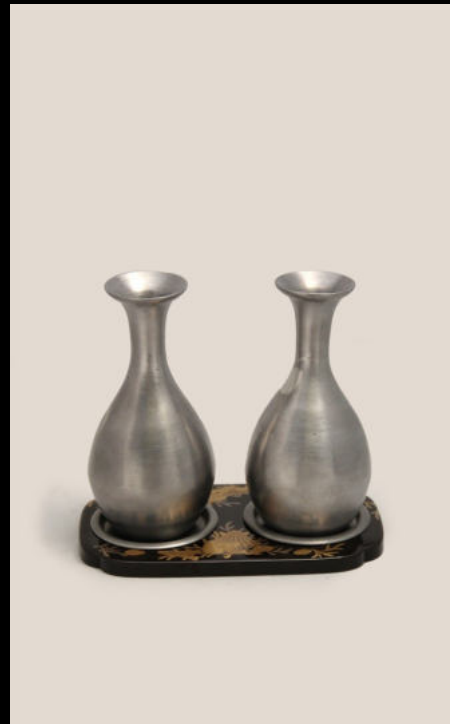
重箱、盃と盆、銘々盆4客、小箱、徳利一対が収納された提重です。

重箱、銘々盆と小箱には海松貝が蒔絵されています。

外枠と盃と盆には松竹梅が蒔絵されています。







18.

染付熨斗形小皿 10客組

永楽 正全（十五代 永楽 善五郎）

共箱

昭和

径14cm×10.5cm 高さ2cm

鐏状の縁で、裏側は四つ足になっています。  
高台の永楽印が十五代正全と十四代妙全のものが  
混ざっています。箱書きは十五代正全です。



19.

## 七福神七寿盃

初代 鈴木 表朔

共箱

明治 - 昭和

径10cm 高さ2.8cm

朱塗りの盃の見込みに七福神が蒔絵された7客組の盃です。

鈴木表朔は、木村表斎を始祖とする表派の京塗の伝統的な技法を守る鈴木表朔家が襲名する名跡です。



20.

## 秋草茶碗

長岡 空味

共箱

昭和

径14.5cm×15cm 高さ7.8cm

細かい貫入が入っており、色鮮やかな秋草が描かれています。  
高台脇に印が押されており、窯キズが見られます。

島根県松江のやきものである楽山焼が不振に陥り、一時中断したのち、松江藩主 松平不昧が布志名の陶工であった長岡住右衛門を抜擢し、楽山焼五代として再興にあたらせました。以降、制作を続けている陶家です。歴代の中でも空味は名工の誉が高いです。



## 21.

### 虫明染付茶碗

三代 清風 与平

明治 - 大正

帝室技芸員

径10.5cm 高さ7cm

高台内に「むしあけ」と「清風」の印があります。

箱は合わせ箱です。

三代清風与平は、陶磁器分野で初の帝室技芸員に選出されました。

帝室技芸員は1890年から1944年の55年間のみ存在した皇室による美術作家の保護と制作の奨励制度でした。陶芸界では5人しかいない帝室技芸員のひとりです。パリ万博や内国勸業博覧会等で数々の受賞をしました。

虫明焼は、岡山県瀬戸内市（旧邑久町）で焼かれている焼物で、その始まりは諸説ありますが、およそ300年ほど前とされます。

「宮川香山-没後100年-虫明焼と明治の陶芸（岡山県立美術館）」図録に類似品が掲載されています。



## 22.

### 茶碗「この君は…」

大田垣 蓮月 / 三代 清水 六兵衛

五代清水六兵衛極箱

江戸時代 - 明治

径13.8cm 高さ6cm

この君は めでたきふしを 重ねつつ 末の世ながき ためしにけり

上記歌が茶碗に書かれたお茶碗です。三代清水六兵衛と大田垣蓮月の合作です。

歌の終わりに「蓮月七十七才」、「陶六」の描銘があります。

五代清水六兵衛により、箱の蓋表には「蓮月尼筆 茶盃」、蓋裏には「祖父三代 六兵衛翁作 昭和六年初夏 五世六兵衛題」と書かれています。

蓮月は、江戸時代後期の尼僧であり、著名な歌人です。

歌人としての評価もさることながら陶芸品も数多く制作しております。

清水六兵衛は、江戸時代中期以来の清水焼陶工の名跡です。

三代六兵衛は、清水六兵衛家 中興の祖ともいわれます。



23.

## 蔦画茶碗

九代 白井 半七

共箱

昭和

径13cm 高さ8cm

外側と内側に蔦の絵が描かれています。

高台脇に半七印が押してあります。

九代半七は先代八代と共に、吉兆の湯木貞一氏と親交が深く、吉兆の器も多く作っていたと言われます。



24.

## 野邊茶碗

堂本 印象 画 / 永楽 即全 (十六代 永楽 善五郎)

共箱

昭和

径19cm×15cm 高さ8.5cm

耳が4つ付いた大変変わった形をしたお茶碗です。  
高台脇には「印象」の銘が、高台内には「永楽」の印があります。  
箱の蓋表には「野邊」、裏側には「自画茶碗 陶工永楽也 印象」と堂本印象により書かれています。  
箱の底には「善五郎造」と永楽即全により書かれています。



25.

## 秋草図水指

堂本 印象 画 / 六代 清水 六兵衛

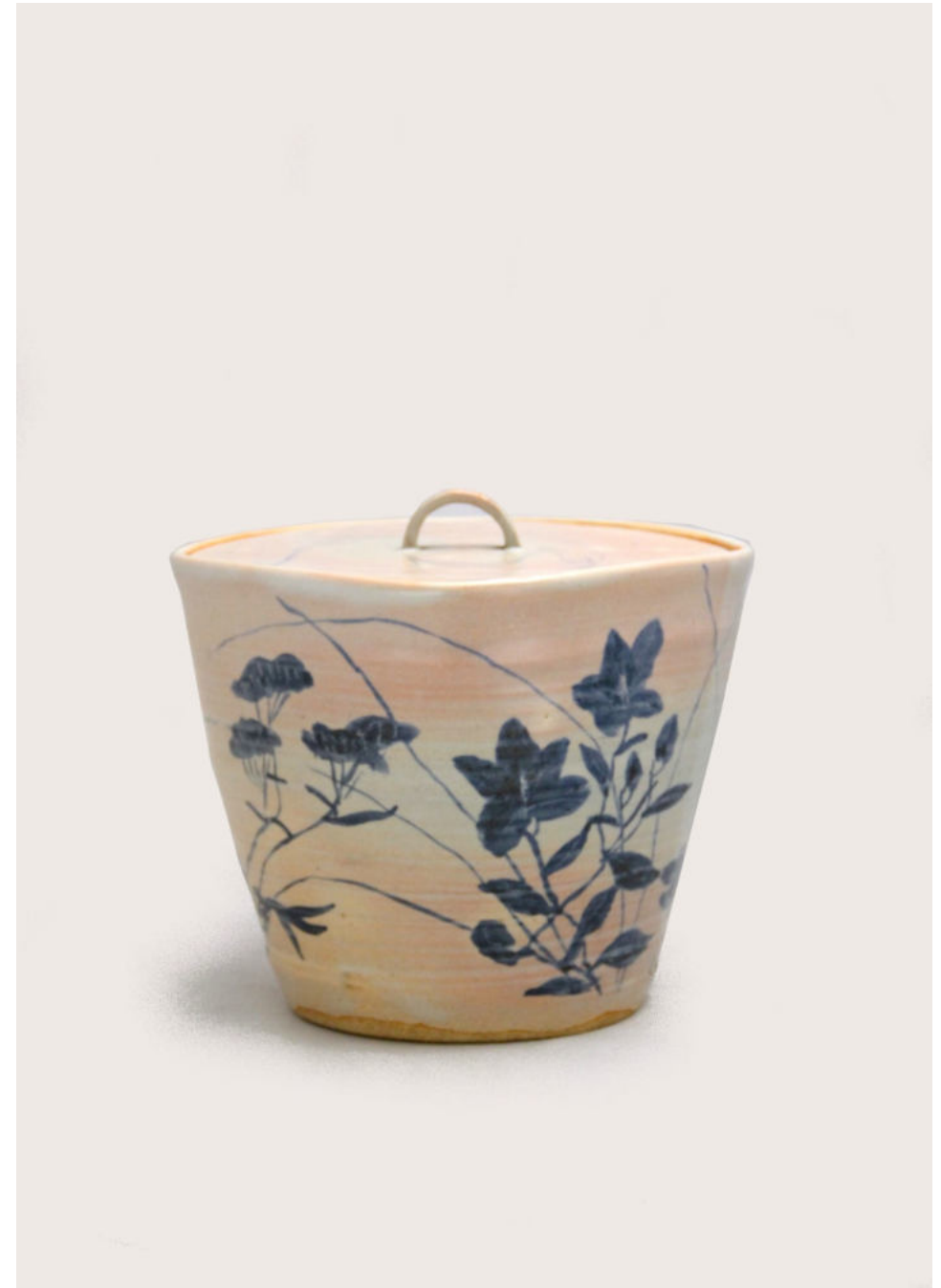
共箱

昭和

径19.5cm 高さ17cm

堂本印象が秋草の絵付けし、六代清水六兵衛が焼いた水指です。四方になっており、側面に秋草が描かれています。蓋には焼成時に窯でできた弾けた跡が見られます。高台には糸切り跡とその時にできたと思われる筋が入っています。

堂本印象には数寄者という一面もあります。表千家の家元とは印象の父の代から親交があり、印象自身も十三代家元の即中斎との付き合いがありました。そして、本作のように茶道具の制作もしています。



26.

色漆塗分捻高杯銘々菓子器 10客組

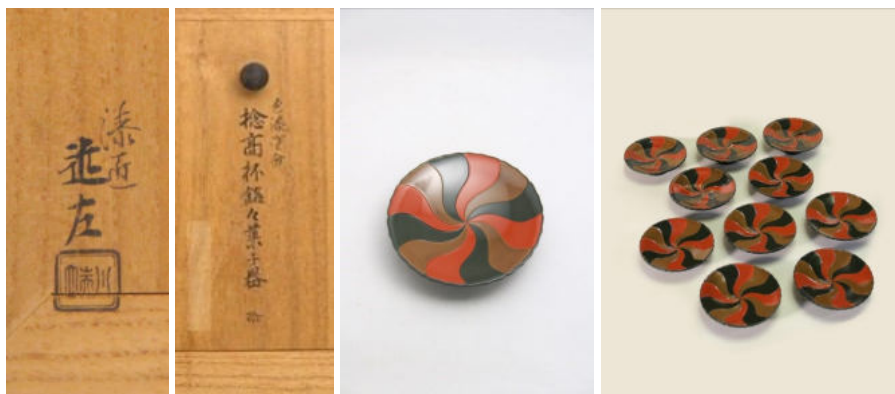
四代 川端 近左

共箱

大正 - 昭和

径14.8cm 高さ4cm

朱色、緑色、茶色の色漆で捻文様が描かれています。  
色と色の間にはほんの少し段差が付いています。  
縁も丸ではなく、輪花状になっています。



27.

## 四方筒釜

弥五郎

大西浄長極箱

江戸時代 宝暦年間

(1751年 - 1764年)

径 18cm 高さ 23cm

鑲付は竹節です。

## 唐銅瓢形風炉

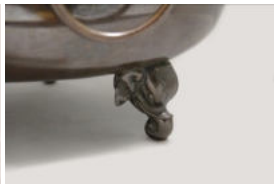
堀山城

大西浄中極箱

江戸時代 宝暦年間

径 39cm 高さ 20cm

鑲付は蝶で、象足です。堀家は、江戸時代に幕府の御用釜師を勤めた釜師の家です。堀家は、京名越家初代三昌の次男の浄栄が、幕府の召に応じて江戸に下り、御釜并銅物御細工御用を命ぜられ、山下御門外川岸通りに御細工地面を拝領し、堀山城守を名乗ったところに始まります。



28.

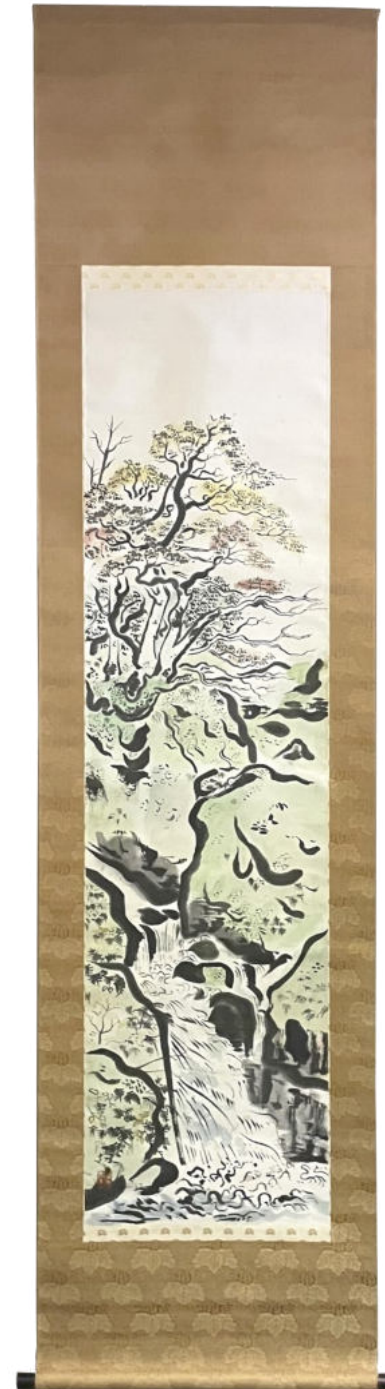
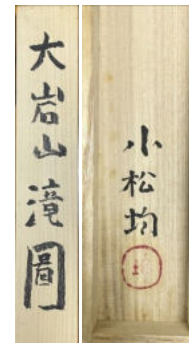
## 大岩山滝図幅

小松 均

紙本  
共箱  
昭和  
幅47cm 長さ204cm

大岩山（おおいわやま）は、京都市伏見区と山科区南西部にまたがる山です。  
本紙右上に汚れと全体的に少しシミがあります。

小松均は山形生まれ、日本画家の川端玉章の画塾川端画学校で学びました。その後、京都の大原に移り住み、大原をはじめとした京都を題材にした画を描いたり、故郷 山形の最上川を題材とした画を描きました。



29.

## 唯心偈

杉本 健吉

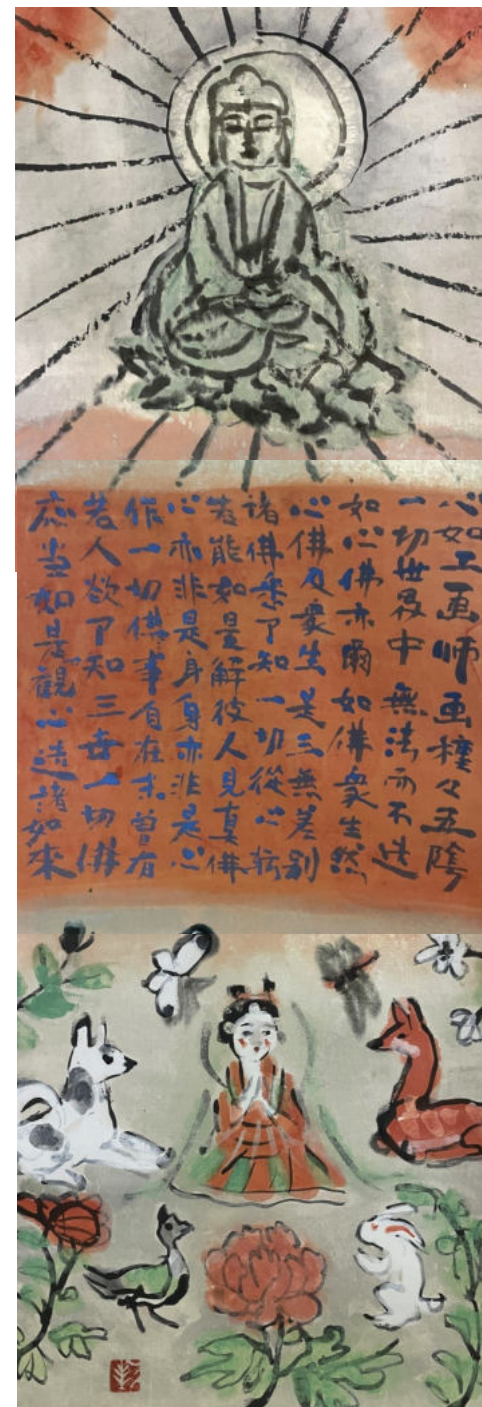
紙本

共箱、表具：辰巳明日香堂

昭和 - 平成

幅34.5cm 長さ146cm

洋画家やグラフィックデザイナーの杉本健吉による作品です。東大寺観音院住職 上司海雲師の知遇を受け、観音院の古土蔵をアトリエにしてもらい、奈良の風物を描きました。会津八一（歌人・早大教授）、入江泰吉（写真家）、須田剋太（洋画家）などが出入りし、交流しました。後に、七人会（入江泰吉、上司海雲、熊谷九寿、杉本健吉、鈴木光、須田剋太、水島弘一）を結成し、奈良の芸術文化に力を注ぎました。中央に書かれている書は華嚴經の唯心偈（ゆいしんげ）です。「あらゆる事物、事象、すべての人々、仏さえも、私達一人一人の心が描き出す画像に他ならない」とする教えを詠っています。唯心は、仏教から派生したもので、科学と哲学と宗教の三つの要素からなる普遍的思想です。表具にシミが見られます。



## 作家略歴（五十音順）

### 永楽正全（十五代永楽善五郎）

1893（明治26）年－1968（昭和43）年  
富山県生まれ。東京、埼玉、金沢と転居しながら作陶を続け、昭和2年に京都市東山区に居を移す。特定の師にはつかず、古陶磁を教材として製陶研究に勤しんだ。その後、京都　八瀬に築窯した住居兼工房である「八瀬陶窯」で作陶を始める。昭和30年、鉄釉陶器の技法で人間国宝に認定。

### 永楽即全（十六代永楽善五郎）

1917（大正6）年 - 1998（平成10）年  
十四代得全の甥十五代正全の子。妙全の養嗣子。三井家・三千家に入出りし数々の名品を作る。茶道隆盛と共に現代の名工の一人に数えられる。

### 大田垣 蓮月

1791（寛政3）年 - 1875（明治8）年  
歌人、書家、陶芸家。京都出身。夫や子供らに先立たれ、出家し、蓮月尼と称した。自分の歌を彫り込んだ陶器　蓮月焼で知られる。出家後、若き日の富岡鉄斎を侍童として暮らす。自費で鴨川に丸太町橋も架けるなど、慈善活動に勤しんだ。

### 加藤 卓男

1917（大正6）年 - 2005（平成17）年  
岐阜県多治見市生まれ。父　五代加藤幸兵衛に師事。古代ペルシア陶器の斬新な色彩や独創的な造形、釉調に魅力を感じ、西アジアでの長年の発掘研究を経て、滅び去った幻の名陶ラスター彩の復元をはじめ、青釉、三彩、ペルシア色絵など、高い芸術性を持つ異民族の文化と日本文化との融合に成功。平成7年に人間国宝に認定。

### 河井 寛次郎

1890（明治23）年 - 1966（昭和41）年  
島根県生まれ。東京高等工業学校窯業科卒後、京都市陶磁器試験場に入所。京都市五条坂に窯を築き作陶を行う。東洋古陶磁の技法による作品を制作していたが、民藝運動に関わり、実用を意識した作品に取り組むようになる。文化勲章、人間国宝、芸術院会員への推薦を辞退。

### 四代 川端 近左

1891（明治24）年 - 1975（昭和50）年  
三代の兄、対吉の三男。初代長男の玉章が二代の弟子、河合漆仙と相談の上、対三郎が12歳の時に三代との養子縁組を決め、三代に師事した。22歳で四代近左を襲名し、数多くの茶道具を製作した。

### 三代 清水 六兵衛

1822（文政5）年 - 1833（明治16）年  
二代清水六兵衛の次男として京都に生まれる。清水六兵衛家中興の祖ともいわれる。絵を四条派の文人画家として知られた小田海僊に学び、陶技を父より学ぶ。海外にも積極的に出品し、日本のやきものの声価を高め、国内では京都美術学校の創立に当たって建議者のひとりとして名を連ねるなど、京焼の発展に尽くした伝統的な陶技による染付・赤絵などに大作を残しながら、洋風食器なども手掛け、幕末から明治にかけての新しい京焼の方向を模索したひとりである。

### 小松 均

1902（明治35）年 - 1989（平成元）年  
山形出身。土田麦僊に学ぶ。昭和3年福田豊四郎らと新樹社を結成。5年帝展特選。21年日本美術院賞。代表作は連作「最上川」。61年文化功労者。1928年から京都近郊の大原に住み、大原の風景を題材にした作品を多数残して「大原の画仙」と称せられた。

### 九代 白井 半七

1928（昭和3）年 - 1987（昭和62）年  
京都芸術大学卒業後、8代と同様に乾山写を得意とし、その他にも、独自の作風の茶陶も製している。昭和55年、兵庫県三田市大原に移窯。8代と共に料亭「吉兆」と親交を深めており、茶道具や会席の器など「吉兆好」の作品をよく残した。

### 杉本 健吉

1905（明治38）年 - 2004（平成16）年  
洋画家、イラストレーター、グラフィックデザイナー。愛知県名古屋市生。幼少期を津島市で過ごす。グラフィックデザイナーとして鉄道会社を中心としたポスターや商業デザインの仕事を手がける。1925年に京都に出向き岸田劉生の門下に入る。吉川英治作の『新・平家物語』・『私本太平記』等の挿絵を担当し絶賛を得る。1949年、東大寺観音院住職上司海雲師の知遇を受け、観音院の古土蔵をアトリエにしてもらい、奈良の風物を描く。奈良では志賀直哉、入江泰吉らと交流する。1971年、画壇（国画会）よりの引退を表明。しかし、画家としての創作は続ける。

### 鈴木 藏

1934年 -  
重要無形文化財保持者(人間国宝)。岐阜県土岐市出身。この地方は美濃焼の産地であり、父・鈴木通雄は釉薬の研究者。陶土や釉薬についてび、基礎的な知識を身につけた後、荒川豊蔵や加藤土師萌などに師事。桃山時代から継承されてきた陶芸技法である志野の研究に励み、その技法を体得。

### 二代 鈴木 表朔

1905（明治38）年 - 1991（平成3）  
京都生まれ。父・表朔の元で漆塗りの技法を学ぶ。1926（大正15）年、21才の時に、聖徳太子奉賛展入選を果たしたのを皮切りに、創作活動を開始。京展入賞、帝展、文展などに出品を続け、昭和12年、パリ万国博銀賞を受賞。昭和53年、現代の工芸作家展出品、「漆と共に50年」記念個展を開催、昭和56年、古希記念個展を京都高島屋で開催。

### 三代 清風 与平

1851（嘉永4）年 - 1914（大正3）年  
兵庫県に生まれ、京都で没。2代清風与平に入門し、その妹と結婚。のち3代を継ぐ。田能村直入に絵を学んだ。明治22年頃、清風家の跡継ぎの夭逝にともない3代清風与平を襲名。明治26年、陶芸界最初の帝室技芸員となる。

### 田村 耕一

1918（大正7）年 - 1987（昭和62）年  
富本憲吉に師事。昭和28年、郷里の栃木県佐野に築窯。日本伝統工芸展などで活躍した。鉄絵の技法を基本にして独自の作風をきずき、イスタンブール国際陶芸展グランプリなど、国内外での受賞多数。51年、母校　東京芸大の教授。61年、鉄絵で人間国宝。

**富本 憲吉**

1886（明治19）年 - 1963（昭和38）年  
奈良県安堵村生まれ。東京美術学校図  
案科建築部卒業。在学中にイギリスへ  
留学。帰国後、滞日中のバーナード・  
リーチと親交を結び、リーチが6世尾形  
乾山に入門する際に手引きと通訳を  
し、13年みずからも郷里に楽焼、次い  
で15年本焼の窯を築いて作陶の道に  
入った。37年帝国芸術院会員、44年東  
京美術学校教授、64年京都市立美術大  
学教授になる。55年色絵磁器により重  
要無形文化財技術保持者(人間国宝)に認  
定、75年文化勲章受章。

**九代 長岡 空味**

1874（明治7）年 - 1960（昭和35）年  
空味は九代坂高麗左衛門に師事しまし  
た。1917（大正6）年、不昧公百年祭に  
公開された茶器名品に刺激されて茶趣  
がより加わった。楽山焼を後世に残し  
た業績は多大で名工の誉が高い。

**濱田 庄司**

1894（明治27）年 - 1978（昭和53）年  
神奈川県生まれ。東京高等工業学校  
（現東京工業大学）窯業科に入学、板  
谷波山に師事。同校を卒業後は、河井  
寛次郎と共に京都市立陶芸試験場にて  
主に釉薬の研究を行う。この頃、柳宗  
悦、富本憲吉、バーナード・リーチの  
知遇を得る。大正9年、イギリスに帰国  
するリーチに同行、共同してセント・  
アイヴスに築窯。大正13年、帰国し、  
沖縄 壺屋窯などで学び、その後、栃木  
県益子町で作陶を開始。昭和30年、人  
間国宝に認定。

**船木 研兒**

1927（昭和2）年 - 2015（平成27年）  
江戸時代より170年の歴史を持つ布志名  
焼窯元 船木家に生まれる。濱田庄司に  
師事し、その後、日本民芸館賞、現代  
日本陶芸展やサロン・ド・ブランタン  
奨学賞を受賞する。昭和28年には、琉  
球政府の招聘により渡琉、作陶してい  
る。リーチの窯場にて研修。これを機  
に、スリップウェアと呼ばれる英国で  
17-18世紀頃に盛んに作られた化粧泥で  
模様をほどこした品物に魅せられ、こ  
の技法を本格的に取り入れる。日本に  
戻り、各展覧会に出品し受賞。

**松井 康成**

1927（昭和2）年 - 2003（平成15）年  
長野県生まれ。明治大学を卒業し、茨  
城県笠間市にある浄土宗月崇寺の住職  
の跡を継ぐ。その後、廃窯となってい  
た、山門下の窯を再興し、東洋陶磁の  
研究を行う。栃木県の田村耕一に師  
事。練上手の技法を研究し、完成さ  
せ、昭和44年には、第9回伝統工芸総裁  
賞や日本陶磁協会賞などの数々の賞を  
受賞。平成5年、人間国宝に認定。

Memo